

A-Lab Artist Talk

「生まれくる場所」をめぐる

出演 大槻晃美さん(芦屋市立美術博物館学芸員)、小出麻代さん(出品作家)
司会 シティプロモーション事業担当課長 松長
日時 平成29年4月8日(土)／午後3時～午後4時
場所 あまらぶアートラボ



【対談相手について】

小出麻代さん（以下 小出） 今回、大槻さんをお呼びしたのは、美術館学芸員として、また、あまらぶアートラボのアドバイザーとして、現場に関わっておられる立場から、色々なお話を聞かせていただきたいと思ったからです。

【展覧会の構成】

小出 この展覧会は、自由な順序で作品を見てもらいたいと思って構成しましたが、ほとんどの方

は手前の room1 から観られていると思います。ですので、違う順序からも見ていただけるように、今回のトークは奥の和室から始めたいと思います。

【和室】よあけまで

大槻晃美さん（以下 大槻） 「生まれくる場所」という対談テーマをもらった際に何ができるかなと考えた時、小出さんの言葉を引き出していくことが役目だと思い、ギャラリートークの形式を提案しました。作品を前に、いろいろと尋ねていき



たいです。今回の展覧会は 2015 年のグループ展のテーマであった「まちの中の時間」がキーワードですが、小出さん自身で考えられていたテーマはありますか。

小出 まず、どういう風に作っていくか考えた時に、街を知ることから始めようと思いました。いただいた地図を頼りに、気になった場所に行き、話を聞いたり、調べたりしました。その中で、古くからこの街は交通の要としていろんな人が行き交ったり、工場で様々なモノが作られたり、「止まることなく何かがずっと動き続けている街」という印象を持ち、それをテーマにできないかと考えました。この展示室は、他の展示室と、対となって存在していて、他室が外に向かって動き続けるものだとしたら、ここは、自分の内側のようなイメージです。動き続ける為に必要なものをつくる場所。透明シリコンでできた家の下に写真を置いていて、家を覗き込むと写真に映ったイメージがぼんやり見えます。写真は尼崎で撮ったもの、他の場所で撮ったものどちらもあります。

大槻 なぜ写真を下に置いたのでしょうか。

小出 この部屋の作品タイトルは「よあけまで」です。家は、眠ったり、日中あった事を思い出したり、考え事をしたりして過ごす場所でもあるから。ぼんやりした写真を見ることで、自分の中に溜まった記憶を覗いているような作品にしたかったからです。

【room3】こえをみつめる

小出 尼崎のことを調べていた時に、板ガラスの発祥地であるという事を知りました。よく素材としてガラスやアクリルを使うこともあって、製造現場をぜひ見たいなと思い、瓶ガラスの製造工場を見学させていただきました。長いレーンの上に瓶の型が並んでいて、熱を持った真っ赤なガラスの塊が、その型に次々と流されていくんです。瓶は無機物なのに、命あるものを生み出しているように思えました。その光景がずっと印象に残っていて、この作品「こえをみつめる」が生まれました。スライドプロジェクターからは、様々な色で描いたドローイングが映し出されていて、透明や白のオブジェに数秒ごとに当たるようになっていきます。スライドは一周したら、最初に戻りますが、空調でオブジェは揺れ、変化しているので、常に一定ではありません。大学で版画を専攻していたのですが、刷り上がった作品自体よりも、版を介することで、変化が生まれる事や関係性を考えることに段々と興味が移っていきました。例えば、道端に落ちているゴミに、光が当たって反射して、とんでもなく美しく見るとか、雨上がりの電線にポツポツとついている水滴に葉っぱの緑色が映りこんでいるとか、そういう色んな要素がある瞬間、重なり合うことで見えてくるものに興味があります。

【廊下】生まれくるもの

小出 今回、言葉の作品を作ろうと思ったきっかけが2つあります。1つ目は、建物の構造上、鑑賞者は、3つの展示室を続けて見るのではなく、途中長い廊下を歩くことになります。何か仕掛けをつくることで、そこを作品同士を繋ぐ場所にしたかったと考えていました。2つ目は尼崎市立地域研究史料館へ行った時に、今はもう存在しない場所を詠んだ古い和歌を知りました。その言葉が、イ



メージを広げてくれて、頭の中に景色が広がっていく。廊下を歩きながら読み進めることで、言葉が作品のイメージを広げてくれるのではないかと思います。作り方としては、リサーチ時にスケッチする代わりに書き留めていた短い言葉の中から選んだものを、8つの文章にし、壁に貼っています。手前側から読んでも、奥側から読んでもらっても成立するようにしています。また、1つの文章を読んだ時と、2つ、3つ続けて読んだ時とでは、浮かび上がってくるイメージが変わってくるのではと思っています。

大槻 日本語を話している私たちにとっては共通言語で理解しやすい。だから文字の作品は、自分ながらの情景を生み出して、それが作品になって思いが伝わって来るので、言葉の作品は面白いなと思います。これが初めての言葉の作品ということで、どう展開していくのか気になります。

小出 前回のトークゲストは詩人で美術批評もやっている野口卓海さんに来ていただきました。その時に言葉について話をしましたが、「みんな言葉のプロだから、自分は、その言葉を拾ってくるだけ」と仰ってたのが、なるほど、と思いました。

【room 1】うごきつづける

大槻 メーンの会場には作品何点ありますか。

小出 5点です。そのうち3点が、最初にいただいた尼崎の地図を基にした作品です。初めは、地

図から読み取れる情報を元に、色々調べたりしていたのですが、そのうちに町の形が気になってきました。サイズの似た直線的な形をした町が並びエリアもあれば、大きさもバラバラで複雑な形をした町が入り組んだエリアもある。でも町を歩いても、それ自体の形はわからないし、線が引かれている訳でもない。人はたくさん動いているし、埋立地もあるから、土地も日々形を変えています。面白いなと思いました。それぞれの形がよく分かるように、まず地図を町ごとに切りました。それらを、それぞれ糸で吊るした作品が1点。その切り取ったピースをそれぞれトレースしたものが、部屋に入ってすぐの白い壁に貼ってある作品です。次にトレースした形をさらに、透明フィルムの原稿に書き写して、日光の下で印画紙に焼き付けたサイアノタイプが、ここにぶら下がっているもの。その日の日光で焼き付けるけど、またそれを破いて形をどんどん変化させていくことで、最初にお話した「動き続ける街」というイメージを展開できないかなと思って作りました。ライトの光が当たって、影ができたり、裏側にミラーシートを貼っているんで、自分の姿がうつり込んだり、視点を変えることで、見えるものも変わってくるというのが重要になっています。室内も、通常は白い壁がコの字型、いわゆるホワイトキューブ状になっていますが、壁を前に出して、壁の裏側も使うことで、この街が常に裏も表もなく動き続けているということを形にできないかなと思いました。

大槻 今回、尼崎を象徴するような特定のというものが出ていないけれども要素は入っている、リサーチしていくことや、その中で生み出されることについて、小出さんの考えを教えてください。

小出 展示する場所が、どういう性格をしているのか、常に頭のどこかで考えている事の1つです。この空間はどういう地域のどこにあるか、誰がど

んな風に使っていたのか、今はどうなっているのかとか、そういうことを考えることは、すごく重要だと思っています。リサーチにも色々な方法論があると思いますが、私の場合は大きな流れ、例えば史実よりも、個人や場所が持つ、断片的な記憶を抽出することが大事で、地域に住んでいる人に話を聞いたり、その人たちの生活を知る、観察する中で、滲み出てくることを作品にしたいと思っています。尼崎の場合も、実際に来るまではステレオタイプな印象しかなかったけれど、関わってみるとやっぱり違うものがある。それを形にすることが私の仕事かなと。

大槻 2015年の越後妻有アートトリエンナーレでは、廃校になった小学校の3つの部屋を使って、土地やそこに住む人たちのリサーチを行い、作品にされていた。リサーチの作品はこれが初めてと聞きましたが、公民館という場所をリノベーションしてアートセンターにした場所で作品を展示していると、美術館とはちょっと違う面があるなと感じました。あまらぶアートラボはこの場所にあつて、この場所にしかできないものという性格、意味合いが強いのかなと思います。今回リサーチした中で、心に留まった場所や事柄などキーポイントを教えてください。

小出 最初に見た印象が強く残っているので、ガラスは絶対使おうと思いました。この部屋の一番奥で電球が明滅していますが、明るくなった時に見えるのは、鏡越しに映ったカレットという素材です。それはガラス工場見学に行った時に見たもので、今回のチラシの写真にもなっているのですが、不要なピンを砕いて小さくしたものです。それをもう一度溶かして、ガラス瓶の材料にする。ガラスは形を変えながら、ずっと再生している。私が尼崎から受けた印象と、制作の大きなテーマである輪廻とも繋がっていて、ぜひ使いたいなと思って。あとは、人が何気なく言った事がずっと

残っていて、それが制作のアイデアになることも多いのですが、尼崎でもいくつか。

大槻 いろんな物事につながっていくんですね。先日、小出さんが制作活動に入るきっかけとなった話を聞いた時に、「終わりをつくらないようにしている」とおっしゃったのが印象的で、それが「生まれくるもの」として、繋がったり繋がらなかったり、フワフワ浮遊していく感じの言葉であるなと思いました。

小出 終わりをつくらないようにしているというのは、例えば何年か前までの展示では、展示空間内を、細い紐を手がかりとして、視線を巡らせていくと、そこにある小さな作品に出会うという構造で作っていました。紐を追うことで、作品だけでなく途中の空間もじっくり見れるように。その紐の先を空間内で切らずに、建物の窓から外に伸ばしてずっと先まで繋がっているように見える作り方とか。最近の作品は、モノ自体は薄っぺらいけど、そこに光をあてることで影が拡張して、先に続いていくようなものを作っています。考えていることは紐の時と同じで、詩を読むときの余白のような役割をしているというか。物語と違って、そこでおしまいになったらパチッと終わる。でも詩を読むとき、余白があるから、そこで終わらないというか、自分の中で新たに更新し続けていける。自分の作品も、私がここでおしまいというような作り方をするんじゃないかと、見た人がその後



またどこかで違うものや景色に出会ったときに、私の作品と記憶の中で繋がって、思い出す作業をしてもらえるのが望ましいというか。

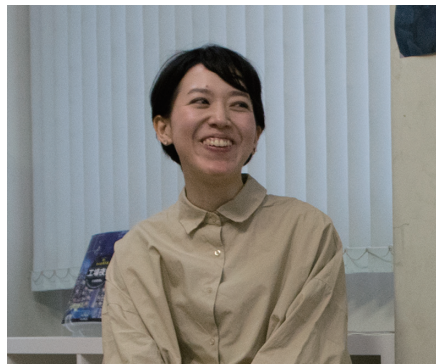
大槻 あまらぶアートラボは、尼崎という地域と強く繋がっている場所だと感じます。展示室で見た感動を持って館を出ても、まだ尼崎の土地であるということが、空間と位置する場所がすごくいい関係で。この場所があって、この作品があって。皆さんがご覧になった後、尼崎との関係性を新たに生み出されたりするんじゃないかなと思います。

小出 この展覧会は、この地域の具体的な何かを制作しましたというものではないので、自分の記憶と繋げてもらって、いろんな見方をしてもらえたらと思います。順番もあるようでない作り方をしているので、自由に巡ってもらいながら、座り込んだり、寝転がってもいいので、何か、自分的ポイントを見つけてもらえることが一番やりがいです。

大槻 最後に小出さんの今後の展開をお話していただいてお茶タイムにしたいと思います。

【ロビー】（今後の制作に関して）

小出 しばらく時間ができるので、生活と制作に同じような割合で取り組む。それを一緒にやっていくと作品が変わってくるんじゃないかなと。あ



小出麻代さん

とは、ずっと室内で展示しているので、素材的になかなかハードですが、屋外での展示に挑戦したいのと、ポリウム感でなく、スケール感を変えたいというのが目標です。

大槻 スケール感を変えるとは？

小出 スケール感は、作品の大きさに限った話ではないです。すごく小さなものでも、それ一つで空間が満たされる作品もある。自分にとってのスケール感をもっと意識するという事です。

大槻 尼崎市民の方で、今日ご覧になられて感じたことは。

来場者 尼崎のイメージが犯罪の町とかお笑いの町とか、ステレオタイプの考え方の人が多いが、すごく素敵な形で翻訳していただいて、尼崎市住民としてとても嬉しく思いました。もともと小出さんの作品って透明感があるものとか、光とかガラスとかを多用していると思います。今回は尼崎が板ガラスの発祥の地ということで、ガラスという素材が作品を作る際に使いやすいのでしょうか。使いにくいけどそこで逆に新しいものが生まれるのかと疑問が沸きました。材質についてお聞きしたいです。

小出 ガラスや鏡、アクリルを使うのは、透過したり、反射したり、鏡だと鑑賞者や他の作品、空間も映り込んだり、それ自体はモノとして薄いけど、組み合わせることで、そこに重層的な広がりを作ることができるからです。学生の頃は素材として、既製品を多用していました。でも既製品はそれだけで美しい、綺麗だから手を加えなくていいやんと思ってしまい、うまく扱えませんでした。なので、自分が丁寧に向き合えるもので、あまり主張してこないものを選んだら板ガラスとか鏡とかが多くなりました。それがもっとクセのあるものだと私はうまく扱えない。基本的に無機質なものを作品に使うことが多いです。

来場者 鏡の見る角度とか、ただの一点透視では

なく、すごく複雑な重層的な構造というのを感じました。さっき言ってたような終わりが無いということも関係しているのかなと思います。尼崎はLGBTの成人式とかをしていて、そういう風な意味でも広がりのある作品というか、いろんなものを感じました。

小出 最初に尼崎は外国人が多いと聞いて、閉ざされてないところだなと思いました。

松長 古い町だが、もともと内の人というのはいくつか少ないというくらいいろんな人がいて。高度経済成長のときには、集団就職でたくさん四国や九州、また、北陸から若い人がたくさん来て。いろんな多様性がある町なので。

小出 カレットのところの作品は、子供だと背の高さが届かなくて見ることができないから、もっと見やすくした方がいいんじゃないかという意見もありました。子供は本当に見たいと思ったら、何か工夫してどうにか見ようとするんじゃないか。という話をしたら、松長さんが、しばらく現場を見た後に、子供の目線だと、下の隙間から覗いて見ることが出来ます！と発見をしてくださりました。あんなに嬉しそうな松長さんを初めて見ました。大人には、結構辛い姿勢ですけど、後でやってみてください。全然見えるものが違います。

来場者 Room 1や3は生まれたきっかけが尼崎と関連してよくわかったが、和室の作品は？

小出 前回のグループ展（「まちの中の時間」2015）の時、設営中は一日中和室にいました。下が保育所だから、時間によって、子供の声が聞こえたり、隣の中学校からのクラブ活動の音、自転車の音、夜になるとご飯の匂いがしたりとか。時計がなくても、大体の時間がわかる。他の展示室はホワイトキューブ状で非日常的になるが、和室だけは、現実の匂いや音がする場所なので、その環境を含めて、作品にしたいなと思いました。



大槻晃実さん